

# 高不安者における否定的視覚刺激への選択的注意と記憶の関連について

森岡 日向子

(安田女子大学 心理学部現代 心理学科)

## 問題と目的

注意が向けられた刺激はよりよく符号化され、その刺激の記憶成績は向上する ( Craik et al., 1996 ) ことや、不安患者や不安気分にある人は、身体や自我の脅威に関連する情報に対して敏感で、注意を向けやすい ( 藤原, 2008 ) ことが知られている。このことから不安患者や不安気分にある人は、脅威情報に注意が行きやすく、さらにその結果として否定的刺激をより正確に記憶している可能性が考えられる。このことから不安患者や不安気分にある人は、否定的刺激に注意が行きやすく、さらにその結果として否定的刺激をより正確に記憶している可能性が考えられる。

不安傾向によって異なる画像刺激に対する選択的注意を視線計測装置を用い確認し、画像ごとの正答率を確認することで、不安傾向と注意バイアス、記憶バイアスの関連について検討することを目的とする。

## 方法

【参加者】女子大学生 25 人 ( 平均年齢  $19.47 \pm 0.97$  歳 ) 高不安群 17 人 低不安群 8 人

【質問紙】状態-特性不安検査 ( STAI ) 日本語版 ( 清水・今栄, 1981 ) の特性不安のみ、使用し 3 つの群 ( 高不安群, 中不安群, 低不安群 ) に分けた。実験は、高不安群と低不安群を対象とした。

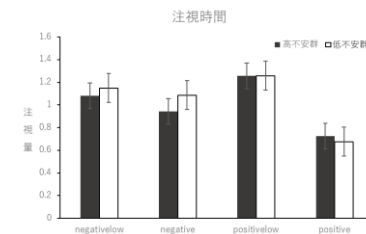
【測定機器】視線計測装置、画像刺激 IAPS ( ネガティブ, ネガティブ low, ポジティブ, ポジティブ low, ニュートラル刺激の 5 種類に分類 )

【手続き】①記録段階では、PsychoPy に表示される情動刺激とニュートラル刺激の 2 つ刺激をペア関係なく全ての画像を覚えるよう求めた。刺激は 0.5 秒の注視点の後 3 秒間刺激を呈示を 80 試行を行った。②干渉課題によって短期記憶を消去した。③再認段階では既見刺激か初見刺激かの回答を求め、全 80 試行を実施した。

## 結果

独立変数を群と情動刺激タイプ、従属変数を注視時間とした分散分析を行った。いずれの刺激タイプにおいても群の主効果は有意ではなかった。ネガティブ刺激 ( $p = .48$ ), ネガティブ low 刺激 ( $p = .102$ ), ポジティブ刺激 ( $p = .989$ ) および、ポジ

ティブ low 刺激 ( $p = .624$ )。



独立変数を群と情動刺激タイプ、従属変数を正答率とした分散分析を行った。

その結果、いずれの刺激タイプにおいても群の主効果は有意ではなかった。ネガティブ刺激 ( $p = .811$ ), ネガティブ low 刺激 ( $p = .746$ ), ポジティブ刺激 ( $p = .827$ ), ポジティブ low 刺激 ( $p = .685$ ), およびニュートラル刺激 ( $p = .917$ )。

## 考察

注視時間において有意差は示されなかった。本研究では、人や動物、植物など多様な画像刺激を使用したが、先行研究では人の表情刺激を対象としており、刺激の種類の違いが結果に影響した可能性がある。また、不安傾向の高い人は初期段階で脅威刺激に注視が向くものの、刺激の長時間提示時には注視を避ける回避傾向を示し、結果として全体の注視時間には群間差が現れにくいことが報告されている ( Calvo & Avero, 2005 )。このことから、注視の維持や全体的な視線パターンには顕著な偏りがみられる可能性が示唆される。これは、まず不安や脅威のある刺激に対して素早く注意を向ける一方で、その後その刺激から注意を逸らそうとする回避行動をとるという Vigilance-avoidance パターンの二重過程モデルが考えられる。

正答率においても有意差は示されなかった。高不安者は、作業記憶内で内省的注意を向ける際や視覚的に呈示された単語を処理する際に、活性化した妨害情報による干渉をうまく抑えられない ( Hoshino et al., 2014 )。このことから、妨害情報の抑制困難さが課題遂行において記憶の記録段階に影響を及ぼしていることが考えられる。

今後は、特性不安のみならず社交不安など不安の下位分類を区別して検討することや、刺激を内容ごとに分類した検討が望まれる。

【指導教員：齋藤 大輔】